

ユスティノスにおける聖餐

—「犠牲」の問題を中心にして—

打 樋 啓 史

2世紀の教父であり、哲学者にして殉教者の名をもって知られるユスティノスは、その著『第1弁明』や『ユダヤ人トリュフォンとの対話』の中で何度か聖餐に言及している。⁽¹⁾ その内『ユダヤ人トリュフォンとの対話』では、聖餐が一種の犠牲であるという見解が重視され、繰り返し述べられている。

ところで聖餐を一種の犠牲として理解する方法は、1世紀から3世紀にかけての聖餐に関する最古の資料に共通して見られるものであり⁽²⁾、4世紀以後、諸文献においてより頻繁かつ明確に表されるようになった。⁽³⁾ この経過を概観すると、次のような問いが浮かんでくる。古代教会の聖餐理解には地域や時代によってある程度多様性があったにも関わらず、聖餐を教会の犠牲として理解するという点で諸文書がこのように常に一致しているのはなぜなのか。

それはおそらく、これが個人の創作的見解ではなく一つの伝承であったからであると推測される。では、「聖餐が一種の犠牲である」という伝承の発端はどこにあり、それがどのように継承、展開されていったのか。この問題についてはなお未解決の点が多く、明確な解答は得られない。しかし、一つの資料を基にこの伝承の初期の流れを辿ることは可能であろう。

われわれはここで、そのような意図に沿って、ユスティノスの記述の中にこの伝承がどのような形で取り入れられ、それがどのように受けとめられ表現されているのかを探りたい。そのことによって、犠牲としての聖餐理解の初期の伝承史におけるユスティノスの位置を検討する。

1

はじめに『ユダヤ人トリュフォンとの対話』から関連テキストを訳出しておく。

「重い皮膚病から清められた者に命じられた上等の小麦粉という捧げ物は、私たちの主イエス・キリストが、その受難の記念として捧げるように私たちにお命じになったエウカリスティアのパンの予型だったのです。主がその受難を耐え忍ばれたのは、人々の魂をすべての悪から清めるためでした。それと同時に、キリストがそうお命じになったのは、神が世界とそこにある一切のものを人間のために創造し、私たちを生来の悪から解放し、神のみ旨に従って苦しまれた方によって主権と力とをことごとく滅ぼしてくださったことに、私たちが感謝するためであったのです。

その当時、あなたがた（ユダヤ人）が捧げていた犠牲について、神は12人（の預言者）の一人であるマラキを通して次のように語っておられます。『わたしはあなたたちを喜ぶことはできない、と主は言われる。わたしは犠牲をあなたたちの手から受け入れはしない。日の出る所から日の入る所まで、諸国の民によってわが名はあがめられ、至るところでわが名のために香がたかれ、清い犠牲が捧げられている。わが名は諸国の民の間で大いなるものだからである、と主は言われる。それなのに、あなたたちはこれを冒瀆した。』

これらの箇所、神はすでに、私たち諸国の民が至るところで神に捧げている犠牲、すなわちエウカリスティアのパンとエウカリスティアの杯について予告しておられます。と同時に、ご自分の御名が私たちによっては崇められるが、あなたがたによっては冒瀆されると付け加えておられます。」（41章）⁽⁴⁾

「この預言（イザヤ33:13-19）においてもまた、神は明らかに、われらのキリストがその受肉の記念として捧げるようにお命じになったパンと—その受肉とは彼を信じる人々のためのものであり、それらの人々のために彼は苦しみをも受けたのですが—、その血の記念として感謝して捧げるようにお命じになった杯について語っておられます。」（70章）⁽⁵⁾

「それゆえ、イエス・キリストがお命じになった、その名によるすべての犠牲、すなわち世界の至るところでパンと杯から成るエウカリスティアにおいてキリスト者がささげている犠牲は、ご自身によみされるものであると、神は前以て証言されたのです。

…私自身も、ふさわしい者とされた人々の祈りと感謝だけが、唯一完全で神によみされる犠牲であると言います。

これらは、キリスト者が食物と飲物から成る記念において捧げるように教えられた唯一の犠牲なのです。この記念において、神の御子が彼らのために耐え忍ばれた受難が想起されるのです。」(117章)⁽⁶⁾

これらのテキストを眺めると、ユスティノスが聖餐を一種の「犠牲」(θύσία)または「捧げ物」(προσφορά)と考えているのは明らかである。ただし、ユスティノスがこの問題について体系的に論じてはいないため、どのような意味で聖餐が犠牲であるのかはそう明瞭でない。⁽⁷⁾ しかし、テキストそのものから次の三点が明らかになる。

第一に、聖餐における犠牲が旧約の犠牲の成就として考えられ、特にマラキ書1:10-12の預言が重視されていること。第二に、その際聖餐における犠牲とは、具体的には「祈りと感謝」、および「パンと杯」を指すということ。第三に、それらの犠牲が「キリストの受難(または受肉)の記念として」捧げられるということである。このように、ユスティノスの記述の中には、犠牲としての聖餐理解の伝承に関して複数の要素が見いだされる。⁽⁸⁾ 以下、これらの三点を順に考察していく。

2

『ユダヤ人トリュフォンとの対話』が表題の示す通りユダヤ教徒との対話文書であることとも関係しているが⁽⁹⁾、ユスティノスは前掲のテキストの中で度々聖餐を旧約聖書との関連において説明する。たとえば、41章ではレビ記14:10の「重い皮膚病から清められた者に命じられた上等の小麦粉という捧げ物」が聖餐のパンの予型であったと述べられ、70章ではイザヤ書33:16の「彼の糧

ユスティノスにおける聖餐

は備えられ、水は絶えることがない」という言葉が聖餐のパンと杯についての預言であると考えられている。さらに41章と117章で、マラキ書1:10-12の預言が取り上げられ、「清い犠牲」が聖餐における犠牲を指すものとされている。これらすべての箇所において、聖餐が旧約の預言や予型の成就として、特に旧約の犠牲の完成として理解されている。

旧約聖書を用いたこのような聖餐理解は、ユスティノス独自のものではなく古代教会において一般的なものであった。⁽¹⁰⁾ たしかに、初期の教父らはイエス自身の思想の中にある非祭儀的な面を継承して、ユダヤ教や異教において重んじられていた動物犠牲を否定した。⁽¹¹⁾ しかしこのような批判は、旧約の祭儀律法における犠牲を全面的に否定するのではなく、むしろそれをキリスト教の枠組みの中で、より霊的な意味において確立させるという方向で展開されたのである。⁽¹²⁾ この営みにおいて、多くの教父らは聖餐こそが旧約の犠牲の成就であり、新しいイスラエルによる神への犠牲であると理解した。⁽¹³⁾

ユスティノスは、この確信を表現するために、マラキ1:10-12の「日の出る所から日の入る所まで、諸国の民によってわが名は崇められ、至るところでわが名のために香がたかれ、清い犠牲が捧げられている」という預言を『ユダヤ人トリュフォンとの対話』の中で計4回引用しており、諸国民による「清い犠牲」(*θυσία καθάρᾱ*)を聖餐と同一視している。⁽¹⁴⁾

「わたしは犠牲をあなたがたの手から受け入れはしない」と当時のユダヤ教の犠牲の内実の伴わない形式主義を批判し、「諸国の民によってわが名は崇められ、至るところでわが名のために…清い犠牲が捧げられている」と異邦人の犠牲の方が純粹で清いものであると述べることによって同胞に回心を迫ったこの預言は、ユダヤ人という一民族に限定されない「諸国の民」、すなわち新しい神の民・教会による犠牲について語ったものであるとユスティノスは理解する。

ユスティノスのみならず、聖餐に関する初期の文献が共通してこの預言を用いており、多くの場合「清い犠牲」が聖餐を指すものと考えられている。⁽¹⁵⁾ このことから、犠牲としての聖餐理解の初期の形成段階において、マラキ1:

10-12の聖餐論的解釈が大きな役割を果たしており、ユスティノスもまたこの解釈を知っていたことは確実である。⁽¹⁶⁾

しかしユスティノスが「清い犠牲」を聖餐と同一視する場合、その犠牲とは聖餐を構成するどの要素に対応するものなのか。41章では、神が予告した諸国民による犠牲とはエウカリスティアのパンと杯のことであると語られている。一方117章では、「私自身も、ふさわしい者とされた人々の祈りと感謝だけが、唯一完全で神によみされる犠牲であると言います」と語られる。ここでは、「祈りと感謝」(εὐχὴ καὶ εὐχαριστία)が「清い犠牲」なのである。

そこでまず「祈りと感謝」という面から、次に「パンと杯」という面から、ユスティノスに見られる犠牲としての聖餐理解を探っていききたい。

3

ユスティノスは、『ユダヤ人トリュフォンとの対話』117章において、「祈りと感謝だけが、唯一完全で神によみされる犠牲」であり、それは「キリスト者が…記念において捧げるように教えられた唯一の犠牲である」と語る。これ以外にもユスティノスの著作には、物質的な犠牲を否定し、犠牲をより霊的に解釈した言葉が見られる。

『第1弁明』9章では異教のいけにえについて記され、10章ではこう続けられている。「私共は、神は人間の側からの物質的な捧げ物を必要とはしない、と伝え受けております。なぜなら、神こそ万物を与えてくださることを知っているからです。私共が教えられ信じて疑わぬところによれば、神が受け入れてくださる者はただ、ご自身に属する善、すなわち節制、正義、人類愛に倣い、かつ何であれ神にかなったことを行う人なのです。」⁽¹⁷⁾

また同書13章では、キリスト者がいけにえを捧げないので無神論の徒であるという非難に対してこう反論されている。「私共は、この万有の造物主を畏敬し、この方は—私共の受けた教えによれば—犠牲の血も神酒も薫香も必要としないと主張し、彼が恵み与えたもうたものすべてのゆえに、祈りと感謝の言葉によって力の限り神に頌栄を捧げているのです。というのも、このことこそが

ユスティノスにおける聖餐

彼にふさわしい誉れであると伝え受けているためなのです。—すなわち彼が生活の資として生じさせてくださったものを火で犠牲として浪費するのではなく、自分自身と乏しい者とのために足らすこと、他方神に対しては、言葉を通じて、感謝の心をもって儀式と頌歌とを捧げること。」⁽¹⁸⁾

さらに『ユダヤ人トリュフォンとの対話』118章には、イザヤ、ナタン、エゼキエルらの預言の引用に続いてこうある。「イザヤや他の預言者たちが、(キリストの)再臨において血と神酒の犠牲が祭壇にもたらされる、と語っていると考えるはなりません。むしろ、それは真に霊的な犠牲、すなわち賛美と感謝なのです。」⁽¹⁹⁾

このようにユスティノスは、神に物質的な捧げ物をすることに強く反対し、むしろ神が人間のために与えたすべてを自らや他者のために用いるべきであると主張する。そして、それらのもののゆえの神への感謝、祈り、賛美、また神に向けられた生活そのものが、神に喜ばれる有意味なものであると言う。その中でもとりわけ、「エウカリスティア」⁽²⁰⁾において捧げられる「祈りと感謝」は「唯一の犠牲」と言われる。これは、諸宗教においていけにえが儀式の中で捧げられたように、キリスト者が共同の礼拝式の中で捧げる霊的な犠牲なのである。聖餐式における「祈りと感謝」は、キリスト者が各々の生活の中で捧げているすべての犠牲の中心であり、「一つの客観的な感謝」なのである。⁽²¹⁾

では、聖餐式における「祈りと感謝」とは具体的に何を指すのか。当時のローマでの聖餐式の様子を伝える『第1弁明』65章には、こう記されている。

「それがすむと兄弟たちの指導者のもとに、パンおよび水と混酒を注ぐ杯を運びます。それを彼は手に取り、子と聖霊との名によって万有の父に頌栄を捧げ、父がこれにふさわしい者としてくださったことにたいし、長い感謝をします。彼が祈りと感謝を終えると、臨席する全会衆はアーメンと言って同意をあらわします。」⁽²²⁾

ユスティノスが唯一の犠牲と呼ぶ「祈りと感謝」は、この箇所ではパンと杯が運ばれた後指導者⁽²³⁾によって捧げられる「祈りと感謝」(εὐχὴ καὶ εὐχαριστία)に一致する。それは、毎日曜日や洗礼式後に行われた聖餐式の

中で、指導者が代表して唱え、一同が「アーメン」と同意した聖餐の祈り⁽²⁴⁾を指していることがわかる。

この祈りは、『ユダヤ人トリュフォンとの対話』117章においても『第1弁明』65章においても、*εὐχὴ καὶ εὐχαριστία* という二つの言葉によって指示されている。しかし、ユスティノスがこれを「長い感謝」、「指導者の感謝」とも呼んでいることから、*εὐχὴ* と *εὐχαριστία* が二つの祈りを、または一つの祈りの異なる要素をそれぞれ指示しているのではなく、両者はほぼ同義語として並列されて一つの聖餐の祈り全体を指しており、それはどちらかといえば *εὐχαριστία* という言葉で代表される祈りであったことがわかる。⁽²⁵⁾

では、*εὐχαριστία* と呼ばれる当時のローマにおける聖餐の祈りの内容はいかなるものであったのか。『第1弁明』65章によると、*εὐχὴ καὶ εὐχαριστία* は、頌栄、長い感謝、アーメン、という三部から成っている。この内「長い感謝」の内容が問題となる。これを再構成するのは事実上不可能であるが、テキストを基に大体の構造を推測することはできる。

ユスティノスは、『ユダヤ人トリュフォンとの対話』41章において、小麦粉がエウカリスティアのパンの予型であったと述べた後、キリストがそれを捧げるように命じたのは、「神が世界とそこにある一切のものを人間のために創造し、私たちが生来の悪から解放し、神のみ旨に従って苦しまれた方によって主権と力とをことごとく滅ぼしてくださったことに」感謝するためであったと語る。この箇所は、「長い感謝」の内容に直接言及しているわけではない。しかし、聖餐の意味と目的を述べる際に明示されているこれら感謝の主題は、当然聖餐式における *εὐχαριστία* の中で言い表されたと考えられよう。⁽²⁶⁾

そうすると、「長い感謝」の内容は大きく分ければ創造への感謝と贖いへの感謝の二つであったことが示される。ユスティノス以後の殆どの聖餐の祈りにおいても、「叙唱」⁽²⁷⁾としての感謝の部分が創造と贖いへの感謝を軸として組み立てられていることから、この推測は裏づけられよう。⁽²⁸⁾

さらに『第1弁明』67章によれば *εὐχὴ καὶ εὐχαριστία* は指導者の

ユスティノスにおける聖餐

「力の限り」(*ὅση δύναμις αὐτῷ*) 捧げられる。これは、指導者がその力量に応じて自由な言葉で祈ることができたことを暗示している。⁽²⁹⁾ また「力の限り」や「長い感謝」という言葉から、聖餐の祈りが短いものではなかったことがわかる。これらのことから、当時の聖餐の祈りは厳密に成文化されていない、ある程度の長さをもった祈りであったことが知られる。この祈りは、創造と贖いという二つの主題を軸に、表現などについては司式者のセンスや判断に委ねられ、ある程度即興的に唱えられた。

おそらくこの祈りは、後の成文化された聖餐の祈りの主たる要素となっていく制定語、アナムネーシス、エピクレーシスなどを含むものではなく、構造的にはユダヤ教の食卓の祈り「ベラハー」に近い、純然たる感謝の祈り *εὐχαριστία* であった。⁽³⁰⁾ たしかにユスティノスは『第1弁明』66章において制定語を引用してはいるが、それは聖餐の祈りの一部としてではなく、聖餐の意味と起源を説明するために持ち出されているとの印象を受ける。おそらく当時のローマで、制定語は既に知られ重視されていたが、それを聖餐式の度に祈りの中で引用する習慣はまだ定着していなかったのであろう。⁽³¹⁾

このように、ユスティノスが「唯一の犠牲」と呼ぶ「祈りと感謝」とは、救済史的な枠組みの中で神が人間に与えた恵みの一つ一つに心を留め、神に感謝を捧げる聖餐の祈りなのである。幾人かの研究者は、ユスティノスが聖餐を犠牲として語るとき、そこには何ら可視的なものが内包されておらず、この感謝の祈りのみが意図されていると主張する。⁽³²⁾ しかし、ユスティノスが「祈りと感謝」だけではなく、聖餐のパンと杯をも「犠牲」や「捧げ物」と呼んでいるのは明白である。この側面を次に考察したい。

4

ユスティノス以前の諸文献には、パンと杯⁽³³⁾が聖餐において捧げられる犠牲であるという見解は暗示的にしか見られないが、ユスティノスによってはこれが明白に表現されている。ユスティノスにとって、聖餐のパンと杯とは明らかに「捧げ物」(*προσφορά*)であり「犠牲」(*θυσία*)である。そしてこ

の点に関してもやはり旧約聖書が重視され、聖餐のパンと杯が旧約の犠牲を成就するものとされる。

例えば、『ユダヤ人トリュフォンとの対話』41章では、上等の小麦粉という捧げ物が聖餐のパンという捧げ物の「予型」(τύπος)であると述べられている。ユスティノスはここで、レビ記14:10で「重い皮膚病から清められた者」に命じられる雄羊、雌羊、小麦粉、オリーブ油などの捧げ物の内、素材としてパンに最も近い「小麦粉」だけを選出している。そしてこの「上等の小麦粉」が病気の癒しという恵みへの応答として捧げられるのに対し、聖餐のパンはキリストによる悪からの解放の出来事を記念し、それに感謝するために捧げられる。それゆえ、これら両方の捧げ物の間には内容的な対応関係がある。⁽³⁴⁾

「予型」と訳された τύπος という語は、「来るべきものを前以て映し出すことによって、その来るべき現実を心に呼び起こすところの一つの現実」⁽³⁵⁾を意味する、新約聖書においても大変重要な用語である。神は τύπος によって将来に来るべき現実を予表する。それゆえ τύπος とそれが指示する来るべき現実との間にはきわめて動的な相関関係があることになる。つまり τύπος という語が用いられるとき、純粹に比喩的・靈的な形で別の現実を指し示す ἀλληγορεία とは異なり、予表するものとされるものとの間には歴史的な繋がりがあると考えられている。⁽³⁶⁾

これらのことから、ユスティノスが小麦粉という捧げ物を聖餐のパンの予型と呼ぶとき、前者は不完全にはあるが後者を予表しており、両者間には内容的・歴史的な相関関係があると理解されていることがわかる。ゆえに実際の捧げ物をもって予表される聖餐のパンもまた、一つの実際の捧げ物である。しかしそれは、τύπος が意味するところによれば、前者を超えた、より完全な仕方一つ捧げ物なのである。⁽³⁷⁾

ユスティノスが聖餐のパンと杯をより完全な、しかしそれでも一つの実際の捧げ物・犠牲と考えていることを裏づけるために、もう一つ用語上の問題、先程から既に「捧げる」と訳されてきた ποιεῖν について触れておきたい。

ユスティノスが ποιεῖν を聖餐の犠牲に関して用いるとき、明らかに「わ

ユスティノスにおける聖餐

たしの記念としてこれを行いなさい」(τοῦτο ποιεῖτε εἰς τὴν ἀνάμνησιν μου) というイエスの制定語を念頭に置いている。ユスティノスは常に、εἰς ἀνάμνησιν . . . ποιεῖν という枠組みの中でこの語を用いるのである。

勿論、イエスの言葉にある τοῦτο ποιεῖτε が直接に「これを捧げなさい」を意味するわけではない。⁽³⁸⁾ しかしカーゼルによれば、ποιεῖν はギリシア人たちの間では習慣的に「犠牲を捧げる」という意味で用いられていた。⁽³⁹⁾ また70人訳聖書において、ποιεῖν は多様な意味に使用されているが、その中で「犠牲を捧げる」という意味で60回以上用いられている。⁽⁴⁰⁾ そのような背景から、ユスティノスは制定語にある ποιεῖν を第一に「行う」という意味でとらえつつも、同時にこの語のもつ副概念を考慮して、「行う」ことに「犠牲を捧げる」ことを重ねて理解していた、とするのが妥当であろう。そう考えると、聖餐に関するユスティノスの記述において、ποιεῖν の目的語が殆どの場合「パンと杯」であることも説明がつく。

以上のすべてから、ユスティノスが聖餐のパンと杯を実際に捧げられる犠牲・捧げ物と考えていることが明らかになる。しかし、これは先程見てきたようなユスティノスのもう一つの犠牲理解、神が物質的な何物をも必要とはせず、キリスト者が捧げるべき犠牲とは霊的な「祈りと感謝」に他ならないという主張と矛盾しないのだろうか。これを考える上で、ユスティノスがパンと杯をいかなる目的のために捧げるものと理解しているのかを確認しておく必要がある。

『ユダヤ人トリュフォンとの対話』41章の中の一文を直訳すると、「キリストが、受難の記念のために、また同時にわたしたちが神に感謝するために、捧げるようにお命じになったエウカリスティアのパン」となるように、ここでは聖餐のパンが捧げられる目的として「記念」と「感謝」の二つが明示されている。また同書70章では、パンが「キリストの受肉の記念のために」、杯が「キリストの血の記念のために」、「感謝して」捧げるように命じられたと語られ、117章でも「記念」が強調されている。

ユスティノスは、物質であるパンと杯が犠牲であるという見解が物質的な犠

性の否定となぜ矛盾しないのか、論理的な説明を施していない。しかしこれらの言葉から、キリスト者が聖餐においてパンと杯を捧げるのは神の扶養や宥めのためではないことが明らかになる。万物の創造主であり、物質的な何をも必要とはしない神にパンと杯を捧げるのは、「神に感謝するため」、すなわち言葉による感謝の祈り同様、神の創造と贖いのわざに対する感謝の心を表現するためである。⁽⁴¹⁾ 同時にそれらは、キリストによる救いの出来事を記念・想起するための手段として捧げられる。この点については次項で取り扱う。

このように、ユスティノスが物質的な犠牲を否定するさい問題にしていたのは、単純に犠牲として可視的な物質が用いられるか否かということではなく、むしろそれらが捧げられる目的・方向性であった。ゆえに、「祈りと感謝」が「唯一の犠牲」であると主張されていたにもかかわらず、ユスティノスによれば聖餐のパンと杯もまた一種の犠牲なのである。地の産物を神に捧げることによって神に対する感謝を表現するという方法は、当時の教会がなおユダヤ教的な伝統を保持していたことを示す好例であると言えよう。⁽⁴²⁾

5

上述の通り、ユスティノスが聖餐をマラキの預言した「清い犠牲」に重ねて理解するとき、具体的には「祈りと感謝」および「パンと杯」が犠牲として考慮されている。しかし、ユスティノスはこれらの犠牲とキリスト自身の犠牲、すなわち十字架上の自己奉獻との関係をどう理解していたのか。これが最後に考察すべき点である。

聖餐の中心が主の自己犠牲であるという理解は、3世紀キプリアヌスによって初めて明示され⁽⁴³⁾、4世紀ニケア公会議以後の教父らによって深く省察される主題となった。⁽⁴⁴⁾ ユスティノスより前時代の聖餐に関するテキストには、聖餐と主の犠牲との関係についての言及は皆無に等しい。そして、ユスティノスの場合もこの点についてはまだ視野に入っていない、と判断されることが少なくない。⁽⁴⁵⁾

たしかに、ユスティノスは聖餐を主の十字架よりもむしろ受肉の出来事に基

ユスティノスにおける聖餐

づいて理解しているとの印象を受ける。ユスティノスによれば、聖餐式においてはロゴスの受肉と同様のことが起こる。それゆえ、感謝の祈りによって聖別されたパンと杯は、「受肉したイエスの肉と血」である。ユスティノスが聖餐の効力として重視するのは、キリストの犠牲による贖罪の賜物であるよりもむしろ、「受肉したイエスの肉と血」によってわれわれの肉体が養われるということである。⁽⁴⁶⁾ さらに聖餐のパンと杯は「受肉の記念として」捧げられると言われる。これらのことから、一般的に、ユスティノスの聖餐理解においては受肉が大きな位置を占めており、聖餐と主の犠牲との結びつきは未だ意識されていないと考えられることが多い。⁽⁴⁷⁾

なるほどユスティノスの聖餐に関する記述を見る限り、後のキプリアヌスらほど主の犠牲の問題が大きな位置を占めてはいない。しかし果たして、ユスティノスが聖餐と主の犠牲の結びつきを全く意識していなかったと言い得るのか。

ユスティノスは、イエスの制定語 *τοῦτο ποιεῖτε εἰς τὴν ἀνάμνησιν μου* に基づいて、*ἀνάμνησις* (記念) という概念を聖餐に適用している最初の教父である。そして『トリュフォンとの対話』117章で、「食物と飲物から成る *ἀνάμνησις* において神の御子が耐え忍ばれた受難が想起される」と言うように、ユスティノスにとって聖餐とは主の受難の *ἀνάμνησις* なのである。このように、ユスティノスは聖餐を「受難の *ἀνάμνησις*」と呼び、またパンと杯がこの受難の *ἀνάμνησις* として捧げられると言う。これらの言葉から、ユスティノスが聖餐と主の犠牲、また聖餐の犠牲と主の犠牲との結びつきを既に意識していたと十分に考えられる。以下にこのことを示したい。

まず最初に、ユスティノスがキリストの死を一種の犠牲と見なしていることを確認したい。新約聖書中、特にヘブライ書は、イエスの死が世の罪の贖いのために父に捧げられた犠牲、大祭司キリストの自己奉献であったと述べているが⁽⁴⁸⁾、このような思想の流れはユスティノスにも見られる。『ユダヤ人トリュフォンとの対話』116章では、キリストが「十字架にかけられた大祭司」と呼ばれ⁽⁴⁹⁾、また同書40章にはこう記されている。「神が過越としていけにえに

捧げるようにお命じになった小羊の神秘は、真にキリストの予型でした。その血によって、彼を信じる者たちが、その信仰の強さにしたがって、彼らの家、すなわち彼ら自身に油を塗ったのです。…さらに完全に焼き尽くすように命じられたこの小羊は、キリストの十字架上の受難の象徴だったのです。」⁽⁵⁰⁾ さらに同章のこれに続く箇所では、断食のさいに捧げられる雄羊が、「すべての悔い改めようとする罪人のためのいけにえの捧げ物」であるキリストの到来を告知するものであったとされる。⁽⁵¹⁾

これらの箇所を一見すれば、ユスティノスがキリストの死を一種の犠牲として把握していることが明白になる。さらにこれらのテキストは、ユスティノスがキリストに関して「受難」(*πάθος*) という語を用いるとき、キリストの生涯における諸々の苦しみ全般を意味するのではなく、限定的にイエスの十字架上の死を指すということを示唆する。これはまた、初期の教父らや諸信条による *πάθος* の用法からも裏付けられる。⁽⁵²⁾ それゆえユスティノスが「キリストの受難の *ἀνάμνησις*」というとき、キリストの十字架上の死の *ἀνάμνησις* を意味し、それは内容的に罪人のための犠牲としての死の *ἀνάμνησις* であると言ってよい。

周知の通り、新約聖書や初期の教父らが *ἀνάμνησις* という語を用いるとき、過去の出来事が単に主観的に追憶されるのではなく、より動的・客観的な仕方で「現在化」されるという理解がある。*ἀνάμνησις* とは、神によって引き起こされた過去の出来事が、それを覚えて行われる共同の礼拝や儀式の中で、具体的な意味と効力を伴って今再び現臨することを意味する、そもそもはユダヤ教に遡る礼拝理解を示す用語なのである。⁽⁵³⁾

それゆえ、ユスティノスの「キリストの受難(死)の *ἀνάμνησις*」という言葉の背景には、聖餐式においてキリストによる十字架の犠牲がある神秘的な仕方で現臨し、新たな意味と効力を関与者に与えるという理解があると言えよう。受難の *ἀνάμνησις* という表現が意味するところは、キリストの十字架上の犠牲の現存なのである。

ただしこれは、聖餐式の度に主の犠牲が物理的・機械的に繰り返され、聖餐

ユスティノスにおける聖餐

式自体が客観的な救いの力をもつということではない。ユスティノスの記述にはそのような理解は見られない。ユスティノスが聖餐を主の受難の *ἀνάμνησις* と呼ぶのは、毎回の聖餐式が一度限りの主の犠牲に繋がれている、そこから派生しているという意識の反映なのである。ゆえに主の犠牲による救贖の出来事そのものへの信仰がなければ、いくらその *ἀνάμνησις* としての行為や言葉が繰り返されても意味をなさない。主の犠牲の *ἀνάμνησις* は当然各々の、また共同体の信仰において受けとめられるべき事柄である。⁽⁵⁴⁾

そこで次の点に移りたい。ユスティノスは、聖餐のパンと杯を一種の犠牲と見なしていた。そして既に見たように、ユスティノスが聖餐の犠牲の霊的側面を強調するにもかかわらず、パンと杯という物質を犠牲と見なすのは、それらが捧げられる目的に主眼が置かれているゆえであった。ユスティノスによれば、パンと杯が捧げられる目的は、神の創造と贖いに感謝するためであり、また同時にキリストの受難と受肉を記念するためであった。このようにユスティノスは、パンと杯がキリストの受難の *ἀνάμνησις* として捧げられると言う。

では、パンと杯がキリストの「受難の記念として」、つまりキリストによる一度限りの犠牲の *ἀνάμνησις* のために (*εἰς*) 捧げられるとは何を意味するのか。この表現は、パンと杯がキリストによる人類のための神への犠牲の *ἀνάμνησις* のために、そのわざに用いられるために、人間が神に捧げる犠牲であるという理解を示している。なぜなら、ユスティノスが聖餐式を「食物と飲物から成る *ἀνάμνησις* 」と呼ぶように、*ἀνάμνησις* としての聖餐式にとって可視的・感覚的な物素であるパンと杯は不可欠なものだからである。

ユスティノスがパンと杯の奉献について語るさい、殆どの場合イエスの制定語 *τοῦτο ποιεῖτε εἰς τὴν ἀνάμνησιν μου* に基づき、*ποιεῖν* の中に「(パンと杯を) 捧げる」という意味を内包して考えていることは既述した。キリストを記念するために、*τοῦτο ποιεῖν* —つまりキリストがパンをその体として、杯をその血として使徒たちに分け与えたというその行為を行え— という言葉に従うには、日常的に飲食するパンとブドウ酒を聖餐式のために供し、用いることが不可欠なのである。神を宥めるために、またそれ自体によっ

て神を喜ばせて恩恵を被るためにパンと杯という物質が捧げられるのではなく、パンと杯を捧げる(ποιεῖν)のはあくまでキリストの記念を行う(ποιεῖν)ためであり、捧げることは行うことの一部なのである。⁽⁵⁵⁾ ゆえに、パンと杯の奉獻はキリストの受難の記念、すなわちキリストの犠牲の現在化と不可分の一体を成す。

さらにユスティノスによって「祈りと感謝」、即ち聖餐の祈りもまた犠牲と考えられていることは既述した。ユスティノスの時代の聖餐の祈りは、キリストの死を直接に記念する「アナムネーシス」という項目を含むものではなかったが⁽⁵⁶⁾、感謝の祈りという形において、神の救いのわざの一つ一つを記念するものであり、その中の主題としてキリストによる贖いが大きな位置を占めていた。それゆえキリストの犠牲は、感謝の祈りの言葉によっても ἀνάμνησις されたと言えよう。

このように、聖餐式における犠牲としての祈りの言葉と食物は、神への感謝を表すために捧げられ、それゆえすべての要素によって主の犠牲の ἀνάμνησις が織り成される。聖餐における教会の犠牲とキリストの犠牲は不可分に結びついている。しかしまた同時に、祈りと感謝、パンと杯という犠牲と ἀνάμνησις の対象となるキリストの犠牲とは、それぞれ区別されるものであり、その意味と役割を異にしている。

ユスティノスによれば、聖餐における感謝の祈り、またパンと杯は、キリストの犠牲の ἀνάμνησις のために教会が捧げる犠牲である。教会は、日常的な食物の一部を聖餐式のために供し、感謝の祈りがそれらの上に唱えられることによって ἀνάμνησις が行われた。これに対し、ἀνάμνησις の対象となるキリストの犠牲は、主が人類のために一度限り捧げた犠牲であり、教会が捧げる犠牲ではない。ユスティノスは、キリストの血肉に聖別されたパンと杯を捧げるとは言っていない。むしろ、教会は陪餐によってこれを受けるのである。⁽⁵⁷⁾ パンと杯という犠牲が捧げるものであるのに対し、キリスト自身の犠牲は教会が受けるものである。

ロルドルフが指摘する通り、聖餐における犠牲には元来このような下からの

ユスティノスにおける聖餐

動きと上からの動きとの平衡が保たれている。古代教会の教父らの叙述や典礼テキストは、この両方の運動の平衡を健全に保持している。⁽⁵⁸⁾ このような平衡はユスティノスの記述にも既に確認されるのである。

以上のことから、ユスティノスが聖餐を受肉の原理と同時に、キリストの十字架の犠牲に基づいて理解しており、主の犠牲と聖餐の犠牲との結合を考えていると示唆される。受肉に基づく聖餐理解は、後にアレクサンドリアやアンティオキアなど東方の教父らによって継承され、その根拠となる聖霊の働きが重視された。⁽⁵⁹⁾ それに対しラテン教父らは、聖餐を何よりもまずキリストの受難から理解し、制定語に基づく主の犠牲の再現を最重視した。⁽⁶⁰⁾ キリスト教世界の東西が、地理的にも言語的にもまだそう明確に分離していない時代の人であるユスティノスの聖餐に関する記述の中に、後の東方的傾向と西方的傾向の両者が共存しているのはきわめて意義深い。

以上の通り、聖餐の犠牲の中心がキリストの犠牲であるというキプリアヌスや4世紀の教父らの理解の萌芽は、既にユスティノスにも確かめられる。ユスティノスにとって、聖餐は「受難の記念」であり、パンと杯はそのために捧げられ、それらの食物によってキリストの十字架の死の *ἀνάμνησις* が行われる。このようにユスティノスにおいても既に、教会の犠牲とキリストの犠牲との関係は考慮されていたのである。3、4世紀の教父らの強調するこの思想は、特に独創的なものではなく、それ以前からの伝承の鮮明化に過ぎない。⁽⁶¹⁾

6

最後に以上の考察を基に、ユスティノスによる聖餐の犠牲に関する理解の要点を整理し、犠牲としての聖餐理解の伝承史におけるユスティノスの歴史的位置を確認したい。

1. ユスティノスが聖餐を一種の犠牲として語る場合、常にその前提となっているのが旧約聖書に基づく聖餐理解である。ユスティノスは聖餐を旧約の犠牲の成就として特徴づけ、特にマラキの預言した「諸国の民による清い犠牲」の実現であると考え。これらの言明は、新約諸文書が未だ完全に流布して

いない時代、自らの新しい救いの現実を旧約聖書を基に理解しようと努めた初期の教会の現状をわれわれに垣間見させる。

聖餐を一種の犠牲とする理解は、そもそもこのような事態に起源をもつと考えられよう。教会は、ユダヤ教礼拝の中心を成していた動物犠牲や種々の捧げ物を肯定したわけでも、無批判に継承したわけでもなかった。しかしユダヤ教徒や異教徒らに囲まれて少数者として存在していた初期の教会は、周囲に対して自らの正当性を弁明するために、その礼拝行為の中心を成す聖餐を旧約の犠牲儀礼との連続性の中でとらえ、聖餐がそれを凌駕し、それに取って代わるものであると明言する必要があった。それゆえ、そこで動物が屠られるわけではないが、聖餐が一種の犠牲であることが初期の教会の共通認識となったのである。ユスティノスの記述は、このような理解を明らかに示す最古の資料として価値をもつ。

- ユスティノスは、創造主である神に物質的な犠牲を捧げることを批判し、神によみされる犠牲が真に霊的なものであると説く。このような主張には、ユスティノスの生きた時代背景がよく反映されている。そして、ユスティノスにとって、このような霊的犠牲の頂点を成すのは、聖餐における「祈りと感謝」、即ち聖餐式において司式者によって唱えられた聖餐の祈りなのである。

この聖餐の祈りは、*eὐχαριστία* と呼ばれ、神の創造と贖いを主題とする感謝の祈りであった。この祈りにおいて、神の救いの出来事の一つ一つが覚えられ、それに長い感謝が唱えられた。ユスティノスの報告は、当時のローマでの聖餐の祈りが後の典礼テキストからの知られる成文化された祈りの諸要素を欠いた、より原初的なタイプの祈りであったことを示唆する。

- ユスティノスは、物質的な犠牲を否定し聖餐の祈りを唯一の犠牲とするにも関わらず、聖餐のパンと杯を犠牲と見なす。ユスティノスの用語を分析すると、そのことは一層明らかになる。この矛盾は、パンと杯が捧げられることの意味を詳察すれば解決する。

ユスティノスによれば、パンと杯は神への感謝を表し、キリストの受難と

ユスティノスにおける聖餐

受肉を記念するという目的で神に捧げられる。それは神の宥めを意図した異教の犠牲とは基本的な方向性を異にする。また、ユスティノスがパンと杯の奉獻に関して $\piολεῖν$ という語を用いていることから、それらを「捧げる」($\piολεῖν$) ことがイエスの言葉に従って聖餐式を「行う」($\piολεῖν$) ことの不可欠な一部である、という理解が示される。日常的に飲食するものの一部が神のわざとしての聖餐のために供され、用いられるということがパンと杯が捧げられることの実質的な内容なのである。

ユスティノスは、パンと杯が聖餐における犠牲であるというそれ以前からの伝承を明白に示している最初の人物として意味をもつ。

4. ユスティノスは、聖餐の犠牲とキリストの十字架の犠牲との関係を明確に説明してはいない。しかし、ユスティノスがキリストの受難(死)を一種の犠牲と考え、聖餐をキリストの受難の $\alpha\nu\acute{\alpha}\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ と呼ぶことから、聖餐がキリストの犠牲の現在化であるという理解が示される。

ユスティノスによれば、犠牲であるパンと杯はキリストの受難の $\alpha\nu\acute{\alpha}\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ のために捧げられる。共同の礼拝行為としての $\alpha\nu\acute{\alpha}\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ にとって、可視的な物素であるパンとブドウ酒は不可欠な要素なのである。パンと杯が主の受難の $\alpha\nu\acute{\alpha}\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ のために捧げられるということは、即ち主の犠牲の出来事が現存化されるための手段としてそれらが用いられるということである。それらを捧げ用いることは、主の $\alpha\nu\acute{\alpha}\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ のためにパンと杯による行為を行うことに必然的に内包される。

ユスティノスの聖餐理解において特に重要な点は、ユスティノスがこの時代に $\alpha\nu\acute{\alpha}\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ としての聖餐について語っている唯一の人物であるという点に見いだされよう。 $\alpha\nu\acute{\alpha}\mu\nu\eta\sigma\iota\varsigma$ という語が鍵となって、聖餐における教会の犠牲とキリストの犠牲との結びつきが、既にユスティノスにも確認されるのである。

【注】

本注において使用したユスティノスや他の教父の著作の校訂本は、以下の略号をもって表記する。

CCSL: Corpus Christianorum Series Latina, Turnholti 1954ff..

Corp. Apol. II/2: JC. Th. Otto, Justini Philosophi et Martyris Opera Quae Feruntur Omnia, II (Corpus Apologetarum Christianorum saeculi II), Wiesbaden 1877, ³1969.

Krüger: G.Krüger(ed.), Die Apologien Justinus des Märtyrers, Frankfurt 1968 (=Tübingen ⁴1915).

Lake: K. Lake (ed.), The Apostolic Fathers I, London 1912, ⁹1959.

PG: J.-P. Migne, Patrologiae cursus completus. Series graeca, Paris 1857-1866.

PL: J.-P. Migne, Patrologiae cursus completus. Series latina, Paris 1841-1849

SC: H. de Lubac, J. Daniélou (directeurs-fondateurs), Sources Chrétiennes, Paris 1942ff..

- (1) ユスティノスは、ギリシア哲学の様々な学派を遍歴した後、最終的にキリスト教徒になった人物であり、生涯、監督、長老、執事などの職につかぬ一信徒であった。聖餐に言及したテキストの中で、「伝えられたところによれば」、「教えられて信じて疑わぬところによれば」、「命じられたところによれば」などの言葉が頻繁に用いられていることから、ユスティノスが聖餐に関する自説を語っているのではなく、むしろ2世紀半ばのローマ教会の聖餐の実践と理解に関して教えられたこと、体験したことを率直に報告していると考えられる。なお、ユスティノスの生涯、著作、思想などについては、以下のものを参照。B. Altaner, A. Stuiber, Patrologie, Freiburg ⁹1978, pp.65-71; J.Quasten, Patrology, I, Utrecht 1950, pp.196-219; O. Skarsaune, Justin der Märtyrer, in: Theolo-

ユスティノスにおける聖餐

- gische Realenzyklopädie (以下 TRE と略記), Bd. 17, Berlin 1988, pp.471-487.
- (2) ローマのクレメンズ『コリントのキリスト者への手紙』40:2、44:4 (Lake, p.76, p.78)。『ディダケー』14 (Lake, p.330)。アンティオキアのイグナティオス『エフェソのキリスト者への手紙』5:2 (Lake, p.178)。『トラレスのキリスト者への手紙』7:2 (Lake, p.218)。『フィラデルフィアのキリスト者への手紙』4 (Lake, p.242)。エイレナイオス『異端反駁』IV、17:5、18:1、18:2、18:6 (SC 100, pp.590-595, pp.596f., pp.598f., pp.612-615)。キプリアヌス『書簡』63:1、63:4、63:9、63:13、63:14、63:17 (PL 4, cols. 384, 387 f., 392, 395f., 396f., 398f.)。
- (3) 代表的なものをあげておく。エルサレムのキュリロス『秘義教話』5:7-10 (SC 126, pp.154-160)。アンブロシウス『サクラメントについて』4:5、4:6 (SC 25bis, pp.112-118)。ヨアンネス・クリュソストモス『ヘブライ人への手紙講解』17:3 (PG 63, col. 131)、『テモテへの第2の手紙講解』2:4 (PG 62, col. 612) ほか。
- (4) Corp. Apol. II/2, pp.138f..
- (5) Corp. Apol. II/2, pp.254f..
- (6) Corp. Apol. II/2, pp.416-419.
- (7) それゆえテキストに関して、従来幾つかの異なった解釈がなされてきた。その際多くの場合、解釈の相違はその学者がカトリックかプロテスタントかという教派的背景の違いによるものであった。Cf. H. Graß, Abendmahl II, in: Die Religion in Geschichte und Gegenwart, Bd. I, Tübingen 1957, p.22.
- (8) Cf. W. Rordorf, Le sacrifice eucharistique, in: Theologische Zeitschrift, 25, 1969, p.335
- (9) しかし、本書が実際に起こった対話の記録なのか、文学的虚構なのかは確定できない。またこれが『弁明』の二書同様、ユダヤ人ではなくローマ皇

帝らに宛てて執筆された弁証文学であるという説をとる者もいる。上智大学中世思想研究所編『中世思想原典集成 I - 初期ギリシア教父』、平凡社 1995年、49-50頁、および柴田有・三小田敏雄訳、『ユスティノス（キリスト教教父著作集 1）』、教文館 1992年、239-246頁を参照。

- (10) Cf. G. Kretschmar, *Abendmahl* III/1, in: TRE, Bd. I, Berlin 1977, pp.70f..
- (11) Cf. Rordorf, *op. cit.*, p. 198. イエスの起訴状の訴因はまさに神殿に対するイエスの非難であった。たとえば、マルコ11:15以下などを参照。マタイにおいては、私が望むのは憐れみの心であっていけにえではない」というホセア6:6の預言が、イエスが語ったものとして2度引用されている。マタイ9:13、12:17を参照。
- (12) Cf. Kretschmar, *op. cit.*, pp.70f.; Rordorf, *op. cit.*, p.199.
- (13) Cf. Kretschmar, *op. cit.*, pp.62-64.
- (14) 前掲箇所以外に、『ユダヤ人トリュフォンとの対話』28章、116章で引用されている。Corp. Apol. II/2, pp. 96f., pp.416f..
- (15) 『ディダケー』14 (Lake, *op. cit.*, p.330)。エイレナイオス『異端反駁』IV、17:5 (SC 100, pp.590-595)。テルトゥリアヌス『マルキオン反駁』III、22 (CCSL, I, pp.538-540)。キプリアヌス『クィリヌスへの書』I、16 (CCSL, III, pp.16f.)。聖マルコ典礼については、G. Dix, *The Shape of the Liturgy*, Westminster 1945, 1954, p. 218の英訳を参照。
- (16) Cf. H. B. Swete, *Eucharistic Belief in the Second and Third Centuries*, in: *The Journal of Theological Studies*, 3, 1902, pp.164f..
- (17) Krüger, p.7. ここでは、柴田・三小田訳、前掲書 24頁の邦訳を引用した。
- (18) Krüger, pp. 9f.. 柴田・三小田訳、前掲書 27-28頁。
- (19) Corp. Apol. II/2, pp.420-423.
- (20) この場合の *εὐχαριστία* は、これにかかる「パンと杯」という属格が

ユスティノスにおける聖餐

どのように訳されるかによって意味が異なってくる。「パンと杯」が目的格的属格であれば、「パンと杯の上へのエウカリスティア」となり、聖餐の祈りを意味するが、「パンと杯から成るエウカリスティア」であれば、聖餐式全体を指すことになる。「食物と飲物から成る記念」との対応関係から、後者のように考えるのが適切であろう。ユスティノスにおいては、元来「感謝」を意味した *εὐχαριστία* という語が、聖餐の祈り、聖別されたパンと杯（『第1弁明』66参照。Krüger, pp.56f.）、聖餐式全体という三つの意味を担っている。*εὐχαριστία* の意味の発展については次のものを参照。G. W. H. Lampe, *A Patristic Greek Lexicon*, London 1961, pp.579f. Dix, *op. cit.*, pp.79f..

- (21) O. Casel, *Die Eucharistielehre des hl. Justinus Martyr*, in: *Der Katholik*. 4. F., 94, I, 1914, p.175.
- (22) 67章も参照。Krüger, pp.56-58. 柴田・三小田訳、前掲書 84-85頁。
- (23) 「指導者」と訳されている。*ὁ προεστῶς* は、動詞 *προίστημι* の名詞化したもので、「前に立つ者」や「指揮する者」を意味する。ここでは、前後する時代の資料との関連などから、「監督」（司教）を指すと考えるのが適切である。Cf. Lampe, *op. cit.*, pp.1150f..
- (24) *εὐχαριστία* という語に由来し、たとえば英語で *Eucharistic Prayer* と訳されるこの祈りの名称を、日本の諸教会は「奉献文」、「感謝聖別文」、「聖餐祈祷」などと訳しているが、ここでは便宜的に「聖餐の祈り」と訳すことにする。
- (25) *τάς εὐχάς καὶ τὴν εὐχαριστίαν* や *εὐχὰς καὶ εὐχαριστίας* は、ディックスによれば、ユスティノスの言い回しの上の特徴などから、大きく言って「神への感謝」を指しており、ユスティノスはこの二語をそう厳密には区別していない。Cf. Dix, *op. cit.*, p.223. また、Kretschmar, *op. cit.*, p.61 を参照。
- (26) Cf. Dix, *op. cit.*, p.223. また、H. Lietzmann, *Mass and Lord's Supper - A Study in the History of the Liturgy*, tr. by D. H. G.

Reeve, Leiden 1979, pp.211f.. を参照。

- (27) 「叙唱」(Praefatio) については次のものを参照。W. J. Grisbrooke, *Anaphora*, in: J. G. Davies (ed.), *A Dictionary of Liturgy and Worship*, London 1972, p.13.
- (28) たとえば、3世紀ローマのヒッポリュトスの『使徒伝承』の典礼や4世紀後半シリアの文書『使徒憲章』の典礼がそうである。テキストは、B. ボット著、土屋吉正訳『聖ヒッポリュトスの使徒伝承』、オリエンズ宗教研究所 1983年、12-15頁と J. Beckmann, *Quellen zur Geschichte des christlichen Gottesdienst*, Gütersloh 1956, pp.26-31.
- (29) この点については以下にあげるものを参照。R. P. C. Hanson, *The Liberty of the Bishop to Improvise Prayer in the Eucharist*, in: *Vigiliae Christianae*, 15, 1961, pp.173-176. J. Quasten, *op. cit.*, p. 215.
- (30) 4、5世紀に形を整えていった古典的な聖餐の祈りは、地域によって若干順序の違いはあるが、概ね次の諸要素から構成されている。(1)導入の対話、(2)叙唱・感謝、(3)サンクトゥス、(4)準備のエピクレーシス、(5)制定物語・制定語、(6)アナムネーシス、(7)エピクレーシス、(8)とりなしの祈り、(9)結びの頌栄。
- Cf. Grisbrooke, *op. cit.*, pp. 10-17; E. J. Yarnold, *The Liturgy of the Faithful in the Fourth and Early Fifth Centuries*, in: C. Jones and others (ed.), *The Study of Liturgy*, London 1978, 91989, pp.189-201.
- (31) Cf. E. C. Ratcliff, *The Eucharistic Institution Narrative of Justin Martyr's First Apology*, in: *The Journal of Ecclesiastical History*, 22, 1971, pp.97-102.
- (32) たとえばオズボーンはそのように考えている。Cf. E. F. Osborn, *Justin Martyr*, Tübingen 1973, pp.182f..
- (33) 本文批判の結果、『第1弁明』65の「ブドウ酒」という語が後の付加と考

ユスティノスにおける聖餐

えられるため、ユスティノスの言う「杯」(τὸ ποτήριον)の中身について長く議論されてきた。しかし今日、杯の中身はブドウ酒であったと一般的に認められている。Cf. Osborn, op. cit., pp.181f..

- (34) Cf. M. Jourjon, Justin, in: W. Rordorf and others, *The Eucharist of the Early Christians*, tr. by J. M. O'Connell, New York 1978, pp. 79f.; B. Kollmann, *Ursprung und Gestalten der frühchristlichen Mahlfeier*, Göttingen 1990, p. 144.
- (35) Cf. Jourjon, op. cit., p.80
- (36) Cf. L. Goppelt, τύπος, in: G. Kittel (ed.), *Theological Dictionary of the New Testament* (以下 TDNT と略記), vol VIII, tr. by G. W. Bromiley, Michigan 1972, pp.252f.. また、同じくゴッペルトのさらに詳細な研究として次のものを参照。L. Goppelt, *Typos, Die typologische Deutung des Alten Testaments im Neuen*, Gütersloh 1939.
- (37) ユスティノスの τύπος の用法も前述の新約聖書的な流れを受けている。Cf. Goppelt, in: TDNT, VIII, p.253, n. 35.
- (38) 制定語の解釈については、J. エレミアス著、田村明子訳『イエスの聖餐のことば』、日本基督教団出版局 1974年、405-413頁を参照。
- (39) Cf. Casel, op. cit., p.169.
- (40) たとえば出エジプト記29 : 38-41。Cf. H. Braun, ποιέω, in: TDNT, VI, 1968, p.470.
- (41) Cf. B. Kollmann, op. cit., p.144.
- (42) 後にエイレナイオスやテルトゥリアヌスにもこのような見解が見られるが、キプリアヌスに至っては全く見られないようになる。ここに特に西方のキリスト教会がユダヤ教的な伝統から遠ざかっていく過程を見て取ることができる。中嶋正昭「キプリアヌスの聖餐論」、『キリスト教研究』、第34巻、第1号、同志社大学神学部内キリスト教研究会 1965年、16頁を参照。
- (43) キプリアヌス、『書簡』63 : 14 (PL, 4, cols. 396f..)を参照。なおキプリアヌスの聖餐理解に関する基本的な研究として、R. Johanny, *Cyprian*

of Carthago, in: Rordorf and others, op. cit., pp. 156-182. を参照。

- (44) 注(3)であげたもの以外に、ヨアンネス・クリュソストモス、『ユダの裏切りについての説教』1 : 6 (PG, 49, col. 380)、『コリントの信徒への第1の手紙講解』24 : 2 (PG, 61, col. 200)などを参照。これ以外にも、モプスエスティアのテオドロス、アレクサンドリアのキュリロス、シリアのエフラエムらも聖餐の犠牲のこの側面を強調している。テキストの典拠、および解釈については、Kretschmar, in: TRE, I, pp. 77-81 を参照。またこのような理解を聖餐の祈りとして表現している最古のものが、聖ヤコブ典礼(英訳は、Dix, op. cit., pp. 188-196)である。
- (45) たとえば、Kollmann, op. cit., p. 145. や R. D. Richardson, A Further Inquiry into Eucharistic Origins with Special Reference to New Testament Problems, in: Lietzmann, op. cit., pp. 242-246 を参照。
- (46) 『第1弁明』66 : 2。Krüger, p. 57.
- (47) 注(45)を参照。
- (48) ヘブライ10 : 1-18、9 : 24-28。またエフェソ5 : 2も参照。
- (49) Corp. Apol. II/2, pp. 414-417.
- (50) Corp. Apol. II/2, pp. 134-137.
- (51) Corp. Apol. II/2, pp. 136f..
- (52) イグナティオス、『エフェソのキリスト者への手紙』20 : 1 (Lake, p. 194) やエイレナイオス、『異端反駁』I、10 : 1 (SC, 264, pp. 156f.) を参照。信条については、B. Botte, Problèmes de l' Anamnèse, in: The Journal of Ecclesiastical History, 5, 1954, pp. 16-24、教父らによる $\pi\acute{\alpha}\theta\omicron\varsigma$ の用法については、Lampe, op. cit., pp. 992-995 を参照。
- (53) Cf. Dix, op. cit., pp. 161f., p. 243, p. 245. 「現在化」としてのアナムネーシスに関して、カーゼルの著作は特に重要である。O. カーゼル著、小柳義夫訳『秘儀と秘義—古代の儀礼とキリスト教の典礼』、みずず書房1975年、1985年。特に89-108頁を参照。

ユスティノスにおける聖餐

- (54) ユスティノスは、聖餐に与かる条件として信仰を重視する。『第1弁明』66: 1。Krüger, pp.56f.
- (55) リチャードソンはこの点を適切に述べている。A. リチャードソン著、渡辺英俊・土戸清訳『新約聖書神学概説』、日本基督教団出版局 1967年、645頁を参照。
- (56) Cf. Botte, op. cit., pp.16-24; Grisbrooke, op. cit., p.15.
- (57) Cf. Rordorf, in: ThZs., pp.343-345.
- (58) Cf. Rordorf, in: ThZs., pp.350f..
- (59) たとえばアレクサンドリアのクレメンス、カパドキアの三教父、ヨアンネス・クリュソストモスなど。これらの典拠と総合的な解説は、J. Betz, *Eucharistie als zentrales Mysterium*, in: *Mysterium Salutis*, Bd. IV/2, Einsiedeln 1973, pp.214-223 と H. Feld, *Das Verständnis des Abendmahls*, Darmstadt 1976, pp.83-88 を参照。
- (60) キプリアヌス、アンブロシウスなど。Betz, op. cit., pp.223-230と Feld, op. cit., pp.88-93 を参照。
- (61) 中世を通して主流となり、トリエント公会議において明確化されたミサの犠牲の概念は、ユスティノスが「受難の記念のためにパンと杯が捧げられる」という言葉で表現していた理解の延長線上にある一つの説明、その論理化の結果であると言えよう。それゆえ、16世紀以来聖餐をめぐる最大の争点となってきたミサの犠牲についての理解を、われわれは今日より広い展望からとらえ直す必要がある。Cf. Kretschmar, *Early Christian Liturgy in the Light of contemporary historical Research*, in: *Studia Liturgica*, 16, 1986-1987, p. 46; Rordorf, in: ThZs., pp.350 f..